1. 研究概要

目指す児童像

「強い子　明るい子　美しい子」

研究テーマ

主題　　粘り強く取り組む子

副題　　自ら学習を調整する姿を求めて

目指す授業像

楽しい授業

教材研究・授業研究の充実による授業

児童が自ら学習を調整する姿のある授業

研究テーマ設定の理由

2021年、中央教育審議会から「『令和の日本型学校教育』の構築を目指してー全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びの実現（答申）」を出された。一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。そのために、「日本型学校教育」の成果や強みの継承・発展、「正解主義」や「同調圧力」への偏りからの脱却、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実等が大切だと示されている。

奈須正裕氏は、「『令和の日本型学校教育』を構想するとき、まず立ち現れてくるのは、すべての子供が自立した学習者として育つことだろう。子供がＩＣＴも活用しながら自ら学習を調整し、学び続けていけるようにするには、『指導の個別化』と『学習の個性化』からなる『個別最適な学び』の充実が不可欠になってくる。一人一人に合った指導方法・教材・学習時間等の柔軟な提供（指導の個別化）を進めるとともに、自分に最適な学びについて知り、さらに自己調整しながら自力で学習を計画・実行できる子供の育成（学習の個性化）が目指される。」と述べている。

石川県も、令和６年度学力向上の重点として「『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実させた『主体的・対話的で深い学び』」をあげている。

このような動向を受けて、これまで以上に自立した学習者を目指し、一人一人の学び手に寄り添った取組を進めていくべく上記の研究主題・副題を設定した。

一昨年度は、児童の実態から、学びを駆動させる主体的に学ぶ姿を求めて、「意欲」「粘り強さ」をうむ授業づくりに重点を置き研究を進めてきた。さらに「粘り強さ」と「自己調整力」は相互に関わり合うことをふまえ、昨年度は、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む姿をめざして研究を進めてきた。実践を積み重ねる中で、解決の見通しを持たせる工夫がブラッシュアップされ、児童が学習意欲を持続させながら目的意識をもって活動する姿を見ることができた。一方で、何をすればよいのか分からない児童の姿や、活動しているようであまり学びが深まらない児童の姿も見られた。これらの実践から、教師の目的意識や児童の見取りをふまえた事前準備や関わりや、課題解決にむけた思考の流れ（「共通の軸」）の共有（児童・教師とも）、児童の学びの自覚化が非常に重要であるということに改めて気付かされた。

また、今後の動向に目を向けると、県からは「学力向上に向けた授業づくり」が新たに示され、教科等の見方・考え方を踏まえた共通の軸の下、新しい時代に必要となる資質・能力（教科等で育成する資質・能力、教科等横断的な視点に立って育成する資質・能力）を育成することが大切であると強調されている。新金沢型学校教育モデルでは、自ら課題や活動を選択する機会を設けたり、多様な他者と協働的に学んだりしながら、主体的・対話的で深い学びを実現するための３つの金沢探究スタイルが発表された。特に、児童自身が選択する場の設定と、それを支える教師の授業力向上の重要性を伝えており、まさに本校の研究の方向性と合致するものである。

そこで、昨年度までの研究の成果と課題を踏まえ、今年度を「深める一年」と位置付けて、児童が自らの学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む姿を目指してさらに研究を進めていく。その実現には、土台として、互いに認め合う温かい人間関係づくりも必要不可欠である。他部会と連携を深めて研究を進めていく。

研究内容

重点１　探究し続けたくなる単元構成

・３つの探究（ちょこ探・ほん探・まる探）

・３つの選択（学習課題・学習対象・学習方法）

・自己の学習状況を自覚する場の設定

自ら学習を調整しながら粘り強く取り組む児童の姿を目指して、意図的・計画的に単元構成を考える

重点２　教科の資質・能力を育成するための教師の関わり

・課題解決のための視点の共有と一人一人の目的意識の明確化

・本時のねらいにせまるための手立て

（学習環境の整備、発問や問い返しの吟味、一人一人の学習状況の見取り・支援等）

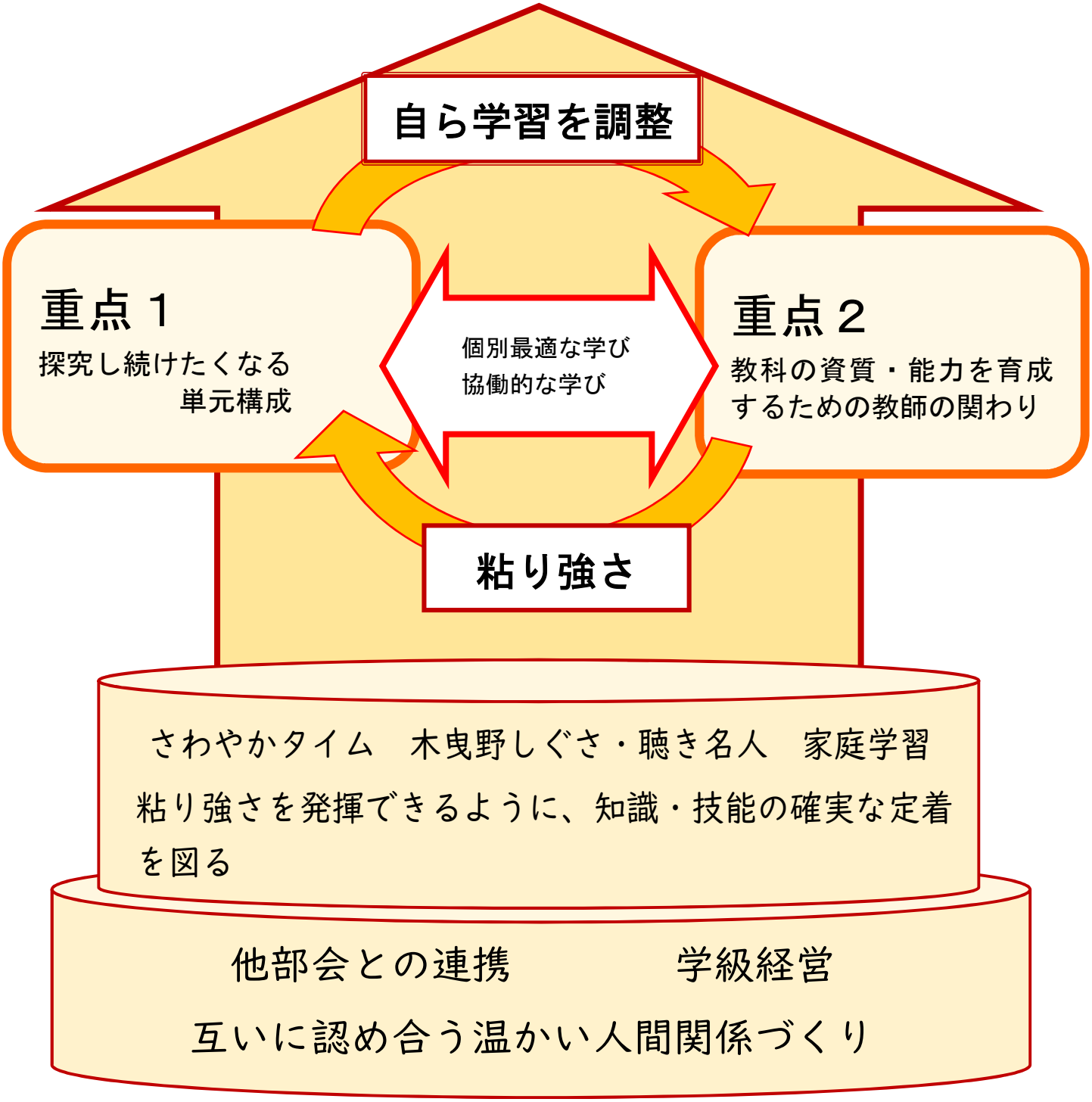
2. 研究構想図

学校教育目標

人間性豊かな児童の育成をめざし、知・徳・体の基礎を培う

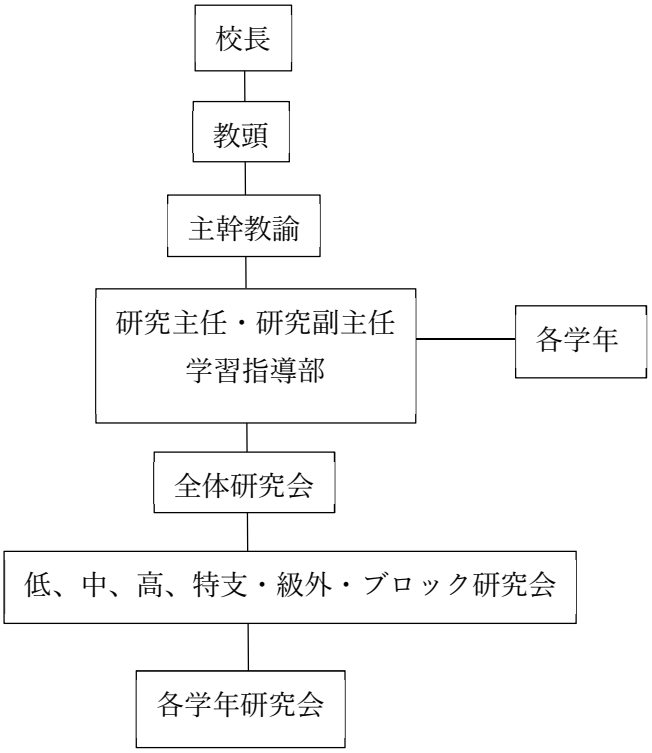
主題　**粘り強く取り組む子**

副題　― 自ら学習を調整する姿を求めて―



3　研究の進め方

(1)研究組織



(2)研究方法

①研究授業

・配当時数が多い国語・算数を軸にして研究を進める。

・低中高各1本を全体研とする。もう1本はブロック研とする。

（低学年で1年生が国語で全体研を行う場合、2年生は算数でブロック研を行うことになる。）

・特別支援学級と級外は、学年研とする。

・全体研3本、ブロック研3本を行う。他は学年研とする。

・各学年同一指導案で研究授業を行う。ただし、本時は変えてもよい。

・全体研、ブロック研は外部講師を要請する。学年研であっても、希望があれば、外部講師を要請する。

ア. 事前研について

・わくわく事前研は、指導案は必ずしも必要ではなく、講師とともに教材研究を深める会とする。

・わくわく事前研には当該学年は参加する。その他誰が参加してもよい。

・わくわく事前研の講師は、研究授業を参観し、助言する者と同一にする。

・わくわく事前研を受けて、指導案を立てることになるが、一人に任せるのではなく、学年全体で考えることを大切にする。

・全体研の事前研は、全員で行う。ブロック研の事前研は、当該学年及び有志とする。

イ. 事後研について

・全体研の事後研は、全員で行う。ブロック研の事後研は、当該学年及び有志とする。

ウ.研究通信（考察）について

・自分の授業を振り返って、一人1枚作成する。

②学力向上の取組

ア.木曳野学びのしぐさ、聴き名人の指導

木曳野学びのしぐさ　　１　授業の準備、チャイムスタート

２　正しく座って学習

３　筆箱の中をそろえる

聴き名人　　「　目を見て　手を止めて　最後まで　聴こう　」

どちらも、年間を通して指導する。

イ. さわやかタイム

国語、算数、その他の教科の「学習」とし、既習事項の復習や知識・技能定着のための15分間とする。

【算数】

朝学カリキュラムに沿って学習を進める。次の単元に必要な既習を朝学習で復習することになる。

補助的な教材については、1・2年は繰り返しによる定着が肝要なため、1・2年のみ寺子屋プリントを購入する。3年生以上は、教科書問題や計算ドリルを繰り返し用いて学習する。

【国語】

ローマ字や漢字などの知識技能の定着を図る。特に、漢字においては、漢字ドリル、漢字ノート、ドリルパーク、漢字小テストを活用し、漢字を文の中で正しく使えるように指導する。

ウ. 学期末漢字計算テスト

・単元末テストで基礎学力等の検証を行う。

・学期末の漢字テスト及び算数テスト（知識・技能）は、90％の合格率を目指して、繰り返し再テストを行う。児童に、基礎学力が身に付くように指導する。

エ. 家庭学習

・年度当初、学校だよりと同様にテトルの連絡配信、学校HPで周知する。

・教室で児童に家庭学習について指導する。家庭学習の手引きは全員に配付し、年間を通して指導する。

(3)研究の検証

実際の児童の姿、授業から研究の検証をする。研究授業、児童のノート、児童アンケート、教員アンケート、リフレクションシートシートの検証を通して、研究を進める。

4　全体研修計画

	全体研究会	学年研究会	OJT きびきの	その他
4月	全体研究会① ・今年度の研究方針 ・学習指導案形式、考察形式提案	教材研究 学年・学級目標	学級開きについて わくわく事前研	木曳野しぐさ取組
5月	全体研究授業（提案）	教材研究	わくわく事前研	
6月	ブロック研究授業	教材研究	わくわく事前研	
7月	全体研究授業	教材研究 児童の実態把握と研究の取組		
8月	全体研究会② ・中間まとめ ・成果と課題	教材研究	わくわく事前研	生徒指導研修会
9月	全体研究授業	教材研究	わくわく事前研	
10月	ブロック研究授業	教材研究	わくわく事前研	
11月	全体研究授業	教材研究		
12月		教材研究 児童の実態把握と研究の取組		
1月		教材研究		
2月	全体研究会③ ・今年度の成果と課題 ・来年度の方向性	教材研究 児童の実態把握と研究の取組		
3月		教育課程の見直し		